

第三章

焼津南部地域の民話

1 焼津南部地域の民話

	焼津	小川	石津	与敷次	中新田	中根	中根新田
災	海害	林聖院と 明応の地震	鳴子の松				
	川						
伝	海	海蔵寺地藏尊の 由来	船酔いを止める 仏様				
	寄り仏	会下の島の お弥勒様					
説	旅人の死と はやり神	川中島八兵衛	五輪さん 川中島八兵衛		おはつばた 川中島八兵衛 丹波の助太郎	六新さん	六部塚 川中島八兵衛
	信仰と奇跡	海蔵寺の鞍馬 ぎぜん坊	浜の水天宮さん	与敷次の 弘法さん お産の守り神	源久さん		萩の堂
動	祟りと妖怪	船幽霊 めやかし			八束藤稲荷		
	わが家の 誇り	お杉お玉 明王院の蛇					花咲き茶釜
物	人	けんぞうさん					
	動物	洗濯狐				報恩の猫	

災害 海

林叟院と明応の地震

文明三年（一四七一）林叟院は小川の東浜に作られた。当時、法永長者と呼ばれた長谷川治郎左衛門正宣が、遠州高尾山の賢仲禅師につくらせたものであった。

明応六年（一四九七）のこと、見慣れぬ僧がこの地にやって来て「ここは危ない。難を逃れたければこの寺を他の地に移しなさい。」と予言をした。「わたしの後についてきなさい」ということばに従うと、僧は高草山の麓の方へと案内した。杉松密林の中をかき分けて着いたそこは、誠に靈驗あらたかな地であった。僧は「この地に寺を移せば、私は山神となって守ってあげよう」と言うとかき消すように姿を消した。賢仲の不思議な知らせを受けた長谷川治郎左衛門正宣は、さっそく寺をここに移し、名を林叟院と書き改める事とした。

翌、明応七年（一四九八）僧の予言どおり大地震があり、津波のため多くの民家が水没し、二万六千人という死者を出す惨事となった。もと林叟院のあった場所も瞬く間に没し海になったそうで、前年予言をしに現れた僧のことは、不思議な物語として伝えられている。

（小川）

波よけ地蔵

田尻北の浜に大きな波が寄せてきた時、白い衣を着た三体の地蔵様が両手を広げて波を鎮めたと伝えられている。北村の浜の松林の中に八十年程前（大正時代）からお堂が建てられ祀られている。

現在でも地区の人たちの手で、毎日ご飯、お茶、お線香が上げられている。

（田尻北）



林叟院 坂本



波よけ地藏 田尻北



小川港入口あたり



鳴子の松

伝説の巨木は今はなく、一五〇号線
脇に孫木がひっそりと立っている

鳴子の松

元禄十二年（一六九九）八月初めより降りだした雨は何日も降り続き、港口は激しい波でふさがり、濁水が浜辺一帯を覆い尽くし、その水は蔵珠院の庭先まで達する程であった。人々は不安を募らせ避難の準備を始めていた。

十五日の夕方のこと、突然百雷が一時に落ちるかのような音がして、それと同時に宵闇せまる岸辺の松に覆いかぶさるように、大波が押し寄せてきた。人々は驚き、若者は年寄りの手を引き、母親は子どもを背負い、与惣次の方へと一斉に逃げだした。ようやく村境まで来た時、そこに大きな松の木があるのを見つけ、村人たちは助け合って木によじ登り枝をしっかりとつかむと、思い思いの恰好でぶら下がった。しかし、ほっとする間もなく、大津波は松の根元を洗い流し、にげ遅れた人々を飲み込んでいった。人々は泣き叫び、その有り様はまさにこの世の地獄であったと言う。

翌朝、ようやく樹上より降りた人々は、その辺りの荒涼たる有り様を見て、津波の恐ろしさに今さらながら慄然とした。

それから、誰いうとなくこの松を「鳴子の松」と言うようになった。それは、津波の時に人々が木にぶら下がった姿が、ちょうどすすめおどしの「鳴子」のようだったので、このように呼ぶようになったと言うことである。

（石津）

災 害 川

千日堂

天文九年（一五四〇）八月の大雨で大井川の堤防が切れ、大洪水となった。大島村の河原には何百という川流れの死体が上がった。これを見て気の毒に思った教念寺の

雲宿和尚は、弟子の円道大徳にお地藏さんをおぶわせ河原に安置した。そして亡くなった人のために、千日間供養を続けたので、小字千日川原の名がつけられた。千日堂とはこの地藏を祀ったお堂のことである。

その後、再び洪水に合い千日堂は村中に移された。

(大島)

寄 り 仏 海

海蔵寺地藏尊の由来

明応九年(一五〇〇)城之腰の海上に、夜毎光明が現れるという不思議が続いた。村人たちが船を出し、網を投げると木造の地藏尊が掛かった。そんな事があってから、この辺りの漁民たちは皆同じ夢を見るようになった。それは、この地藏尊が「安養寺は我に縁のある地だから、我をそこに移せば未永く汝らを守るであろう。」というものであった。そこで人々は、寺を今の位置に移し、名を改め海蔵寺とした。

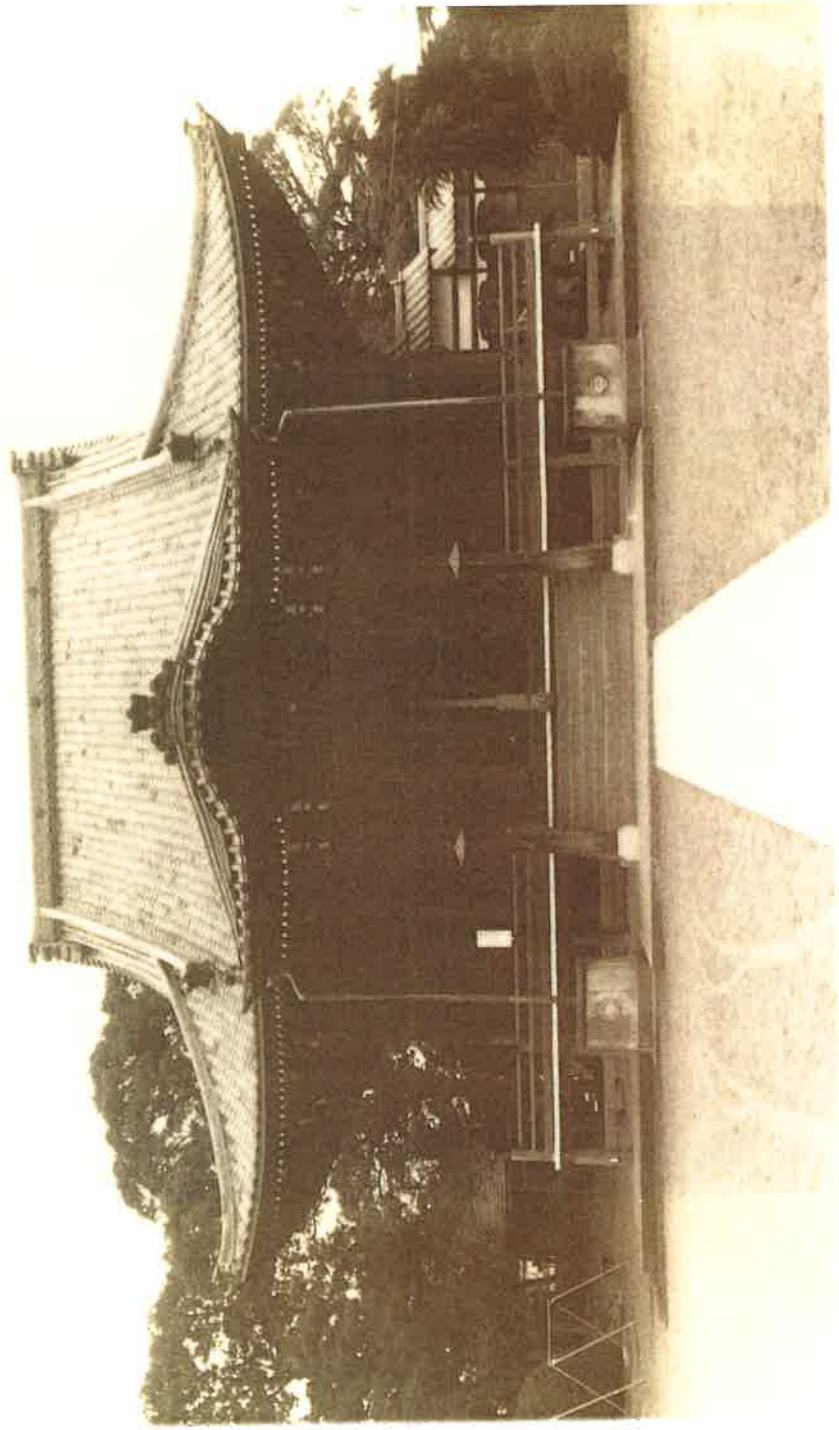
(小川)

会下の島のお弥勒様

明治維新も間もない頃のこと、手、足、首が無残に切り取られた金色の仏様が海を漂い、会下の島の浜辺に打ち上げられた。村人たちは京都で仏様を修理し、庵を作って哀れな仏様をお祀りした。後にこの仏様は元、広幡の八幡神社に祀られていたものが、廢仏毀釈の難に合い、手足をもがれて捨てられた弥勒菩薩だとわかった。

この仏様は「おみろく様」と呼ばれ、信香院の門前に祀られ、その後、会下の島の現在の位置に移された。毎月十二日には、近くの村の人たちが掃除をしたり、お花を上げたりして世話を続けている。九月十二日にお祭りがある。

(会下の島)



海藏寺



甚助の板子（暮板）

海難にあった甚助は、必死に小川の地蔵さんを念じて助かった。



石津 止める仏様の酔船

船酔いを止める仏様

漁師の幸造は、孫の作造を連れて嵐の後の石津の浜を歩いている時、打ち寄せられた木切れや海草の中に光背の付いた十センチ程の仏様を見つけた。幸造は海の彼方からやって来たありがたい仏様として、家に持って帰り仏壇に置き家族とともに大切にした。幸造の家は代々漁師の家であったが、孫の作造は小さい頃から船酔いがひどく漁師の仕事も満足にできなかつた。そこで、作造は漁師をあきらめ百姓となった。

明治三十七年、日露戦争がはじまると石津の村からも若者たちが出征していった。ある日作造のところにも召集令状がきて出征することになった。大陸までの海路は船に弱い者にとっては大変きびしく、荒れ狂う玄海灘では、血反吐を吐き生き絶える者もあつた。誰もが心配するなか作造が重いあしどりで出かけて行くと、残された母は来る日も来る日も仏壇の仏様に息子の無事を一心に祈つた。そして一年後、作造は帰って来た。家族が話を聞くと、不思議なことに大勢の者が船酔いで苦しんでいる時に、どういう訳か自分だけは全く何ともなかつたという事であつた。これはきつとあの仏様のおかげに違いないとあらためて感謝の祈りを捧げたそうである。その後、この仏様は船酔いを止める仏様として近隣の村々で評判となり、大勢の船乗りたちがお参りに来たそうである。

(石津)

寄　り　仏　川

大住の薬師如来

大住の石田健一という人が大井川の水防の当番で役に出ていた時のこと、河原の砂利の中に仏体らしきものを見つけた。拾ってきたがそのままにして置くと仏はもとの河原に戻ってしまった。不思議な仏だともう一度拾って、むらの和尚に見てもらった



大住の薬師如来

目、耳の瘡気に効くと信仰されて
きた お前立ちさんは手に穴あき
の石を持っている

ら薬師如来だということであった。屋敷の南の隅に小さいお堂を建ててお祀りした。すると、川中から来た仏様として評判になった。その後、一中という坊さんがお堂を建てて祀ったが今は、大住の村で祀っている。七月八日が縁日で昔は団子を作って配ったり、アイス、果物、たんきれやげんこつ飴を売る店が出てたいへん賑わった。当日は、世間の衆（村以外の人々）もやって来た。芝居小屋がかかり村芝居をやったこと、頭の上に飴の桶を載せ太鼓を打ちながらやって来た飴やさんなど年寄りには懐かしい思い出となっている。

薬師如来は昭和四十年頃、御開帳したがそれ以来厨子の中に安置されたままである。毎月八日に村のおばあさんたちによってお念仏が申されている。七月八日には、円泉寺の住職によってお経があげられる。

（大住）

旅人の死とはやり神

川中島八兵衛の碑

紀伊の国から流れて来た廻国の巡礼（川中島八兵衛）が「我を祀らば、この地の流行病を除かん」と遺言してこの地方で亡くなったことから、悪病の流行避けに祀るようになったと言われている。

市内のかなり多くの村（中新田、弥宜島、本中根、大島、不岩院、長久寺境内他）に石塔があり、また石塔がなくても供養はしているところが多く、藤枝や島田にも見られ、かなり広い範囲に伝わっている。八月十五日または十六日の夕方、石塔の前か川端にムシロを敷きお婆さんたちが集まって供物を供え、たいまつを燃やし線香をあげて、八兵衛さんのおしょうやをもうす。

八兵衛さん御詠歌（村によって多少の違いがあるある）

川中島八兵衛の碑



中新田



本中根

- 一 紀の国の 川中島の 八兵衛さん ここにまつりて 拝む 人々
- 二 山八つに 谷は九つ 身は一つ わが行く末は 終の里
- 三 みな人の 悪き病を 救はんと ちかいの船に 乗るぞ嬉しき
- 四 紀の国は 遠き渡りと 聞きぬれど 祈れば近い おめぐみもあり
- 五 ありがたや 川中島の 八兵衛さん みなおめぐみに すがらぬはなし
- 六 行き来する 人も休みて 拝むべし たれへたてなく 救いたまへば
- 七 怠らず 皆まつりける するしには たむけの花の 絶えるときなし
- 八 うちよりて となゆる方の 声聞けば あわれにもまた とうとかるべし

(焼津市各地)

石津の五輪さん

昔、石津のたんぼの畦で旅の女が死んだので、村人たちは小さな石塔を建てて供養した。後にこれは五輪さんとよばれ女の人の病気に効くとたいへん評判になり、大勢の人がお参りに来るようになった。「願いがかなえられ病気が治った時には、五輪さんに赤い糸をかけてあげます。」と祈ると早く治るそうで、おはたしには赤い糸をかけ、焼まんじゅうをあげたということである。今でも毎月十六日をおまつりの日として石津新田のおばあさんたちが集まり供養している。

(石津)

おはつぼた

中新田にあったタマの木が植えられたボタ(おはつという人の墓があった)は、そまつにするとよくバチをあてると評判であった。吉永の漁師が「バチをあてるような所なら、その反対に大切にすれば御利益もあるに違いない。」と言って、魚を供えて大漁祈願をしたところ、たいそう効き目があったそうである。「中新田のぼたは申し事に効くそうだ。」と言う噂が伝わると、日増しに参拝者が増え、たいへんなにぎわいとなった。はるばると名古屋から幟を寄付する人もいるほどで、近所の人たちは道

六新さん
畑中のボタの祠に今も祀られている
中根



を修理したり、上がり物を下げる当番を決めたりするほどであった。

墓の主のおはつという人は、田中のお殿様の城下のおばあさんだということで、いつ何故ここに葬られたのかはつきりしない。人々はこのボタの墓をおはつぼたと呼んだ。

(中新田)

丹波の助太郎

中新田にある稲荷神社を南に五十メートル位離れた田の中に、耕地整理（昭和二十七年）以前にはぼたがあり、丹波出身の助太郎という男が祀ってあった。年代や人柄はわからないが、昔洪水の時に川流れにあったものを祀ったらしい。ぼたの木に触ると必ずばちがあたると近所の人々に恐れられていたという。今は場所もはつきりしないが、古老の記憶によると耕地整理でぼたを取り除く時、祟りがないようにシンジンサンに祈禱してもらってから取ったぼたがあったがそこだったかもしれないということであった。

(中新田)

ぐみ島の六新さん

ぐみ島が大井川の川原だった頃には、ぐみの木がたくさんあった。田畑の中のちょっと小高くなったボタに墓地があって松の木が何本か植えられていた。嘉永二年、大井川が氾濫した時、六部の死体が流れてきてこの松の木に引っ掛かった。近くに住んでいた人がかわいそうに思ってボタに埋め塚を作ってあげた。この男はたいそう賭け事が好きであったが、ある時、自分が飼っている牛が雌を生んだら小屋を建ててやると言って、この墓を拜んだ。すると願いの通り雌牛が生まれた。男は約束通りそこに小さな祠を建ててあげて、それから賭け事に勝つように色々お願いをするようになった。すると六新さんは賭け事に効くと評判になりおまいりする人が増えた。その他、病気にもよく効くと言われた。その後、六新さんの松の枝を折っただけでも罰

が当たるといので代々、その場所には手をつけずに大切に扱って来た。他の墓が村の寺（泰然寺）に移されてからも、六新さんはその場に残され、今でも「六新菩薩供養墓」という石碑が建てられている。そして地主である増田正光さん宅で、おせがきの時にお寺の住職さんにお経をあげてもらい供養しているということである。以前は焼津の漁師が大漁祈願にやって来て、魚をあげていたりおせがきの時に、増田さん宅で子どもたちにお菓子や団子を配ったりしたそうである。

（中根）

六部塚

宝歴六年（一七五六）中根新田の蒔田彦右工門さん方に、六十六部が来て行き倒れとなった。介抱の甲斐なく亡くなった六部のために、増田さん宅では新田街道の赤松の下に埋葬して墓をたててやった。命日にあたる七月七日には供養の団子や茶菓子をもってお年寄りが集まり、御詠歌をとなえた。何年か続くうちに、いつしか六部さんは申し事に効くと評判になり参詣の人が増え、露天商も現れる程となった。また、「六部さんは若いもんを好く」と言われ、村の青年たちが世話をするようになった。こんなことから六部さんの墓石は「六部さんの力石」と言われ、「六部さんをおかづぐか」と言っかけてついで力比べをしたそうである。

（中新田）

方眼さん

大島新田の増田久一さんの家の前で六部が病死したので、近所の人たちに相談してネンブリの木の下に葬った。地藏さんの形をした墓はいつしか「方眼さんは申し事に効く」と言われるようになり、近所のお年寄りがよく願をかけたそうである。おはたしには曲物にお酒を入れてあげたそうである。方眼さんを今の洞福寺に移す時は、祟りを恐れ、芝居をやったり、団子をあげて供養したりしたそうである。

（大島）

石井弁吉

大島の千日堂の南の隅に石井弁吉の墓と言われる墓がある。弁吉は明治十四年、行者として流れてきたが、病気のためこのお堂のそばで動けなくなったので、村人が小屋掛けして面倒をみてやった。心尽くしの甲斐もなく亡くなったのを、墓地の一隅に葬った。その後三、四十年して村人も忘れそうになった頃、夢枕にたったそうで、村人たちは改めて弁吉のことを思い出し、墓標を石碑に代えてやったということである。

(大島)

信仰と奇跡

海蔵寺の絵馬

横須城主西尾忠知は日頃帰依する小川地藏堂に絵馬の寄進を思い立ち、自分の愛馬黒雲を描くように画聖狩野元俊に命じた。黒雲は世にも稀な名馬であったので、元俊は寝食を忘れて精進した。その結果、ついに手綱を残すところまで描き上げたのだが、精根つきはて遂に亡くなってしまった。一命を捧げた名画だけあって、その生けるがごとき姿は稀にみる傑作と言われ、忠知はその絵馬をそのまま地藏堂に寄進した。

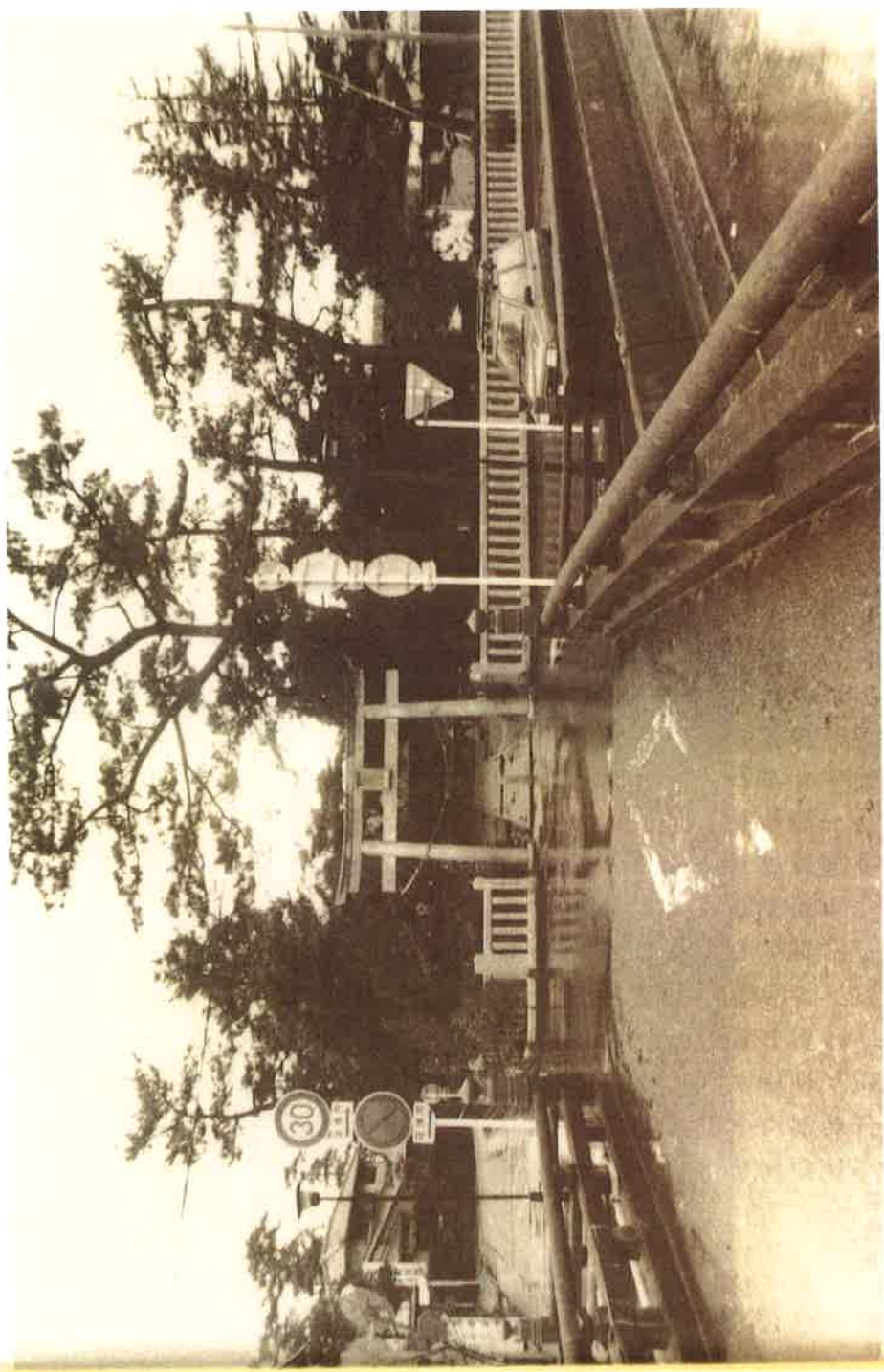
寺では寄進された絵馬に朝夕馬料を供え大切にしたが、ある時大地震があり、人々と共に馬も逃げてしまった。手分けして付近を探したところ、北隣の資福寺の裏で雑草を食べている馬を見つけたが捕まえることが出来なかった。そこで一人の僧が脱け殻の絵馬板を馬前に立て、他の者が馬を追い立てると、不思議なことに馬は板の中に飛び込み元通りの絵になった。住職は再びこのような事が無いようにと、手綱を描き添えたためにその後はこの馬は絵馬板より抜け出すことがなかったということである。

(小川)



海蔵寺の絵馬

馬を繫ぎ止めるにちなんで、絵馬には「歯痛止め」「頭痛止め」等の痛みを止めたり、病気を止めたりする力があると信じられ、それぞれ治してもらいたい場所・場所に湿らせた紙を貼って祈願をした跡がられる。



水天宮さん 石津

ぎぜん坊

小川のはずれに「ぎぜんぼう」と呼ばれた地域がある。これは、昔ここに「ぎぜん坊」と呼ばれた旅の僧が住んでいたためである。

そこは六十反歩ほどの茶畑であった。江戸時代の終わり頃か明治時代の始め頃のこと、信州から流れて来た男が、此処にこもを掛けて雨避けにしたような粗末な庵を結んでひっそりと住んでいた。なんでも、この男はもと武士で信州で人を殺めてここまで流れてきたらしい。毎朝信州の方を向いて手を合わせ祈りを欠かさなかったと言う。

そんなことから、この広い茶畑のあったあたりを「ぎぜんぼう」と言うようになった。今では茶畑もないが、年配者は今でもこの呼び名を使っている。

(小川)

水天宮さん

文久二年(一八六二)より石津に祀られている水天宮さんは、船に乗る人たちを守る神様として土地の人々から厚く信仰されている。

安政三年(一八五六)のこと江戸深川の材木商野口庄三郎と手代の伊藤吉弥が御用材集めの商いにこの地にやって来た。信州から大井川を下り木屋川を利用して木材を流し、石津の貯木場に集めて江戸に送るためであった。

ある年大あらしのため、貯木場がこわれ、山のように積んであった材木は全部流されてしまった。吉弥はじめ商人たちはあわてて、遠い九州の久留米に祀られている水天宮さんに祈った。すると不思議な事に、一夜のうちに風むきが変わり流された材木が全部近くの岸边に打ち上げられたという。商人や村人たちは相談の上、文久二年(一八六二)、久留米藩主有馬氏の屋敷から水難避けの神様を分けてもらい、ここに祀ることになった。その後安産の神様としても信仰を集めている。

中でも漁師たちの信仰は厚く、不漁の時はおふだを竹の筒に入れて海に鎮めたり、海に物を落とした時は、おふだの流れた方向を探すと見つかると言われるなど、豊漁

や海の安全を守ってくれる神様とされている。

(石津)

与惣次の弘法さん

与惣次村のお堂に昔から釈迦如来と弘法大師が祀られている。この弘法大師、村人たちの願いをかなえてくれると評判で、いつも参詣の人が絶えなかった。弘法大師像は、木で作られた靴を履いていたが、村人は願をかける時はこの靴を借りてきて、願いがかなうと返した。

ある日のこと、府中より見慣れない人が与惣次村を尋ねて来た。この男は、釈迦如来と弘法大師のお堂の建てられている土地の地主、山田太郎兵衛であった。太郎兵衛の話では「先日、与惣次の人だという人が来て、お堂が建っている土地をぜひ寄進して頂きたい。また弘法さまの木靴も大分痛んでいるので新しく作って欲しいといって帰られた」ということで、土地の寄進をしに来たということであった。はて誰がそのような申し出をしたものかと村人たちは不思議に思い調べたが、村人の中には府中に掛けたものは一人もいなかった。さては、弘法さまが村人たちの厚い信仰に動かされ、自ら府中に出かけて土地の寄進をお願いしてくれたものだ大変評判になり、ますます信仰が強まったということである。

(与惣次)

お産の守り神

与惣次の八幡様は古くから安産の神様として信仰されてきた。

昔、氏子の中に、何回お産をしてもいずれも難産で子どもに恵まれない女がいた。どうしても跡取りを残したいと、女は八幡宮の神前で「私の命と引換えでも構わないから、どうか子どもを授けてください」と一心に願った。境内にあるひしゃくを手に取りすすいだその時、急に陣痛が始まり、女はひしゃくを手にしたまま、やっこのことで家にたどり着いた。床に着くと間もなく玉のような男の子を無事に産み落とした。

源久さん
今はおはつさんと八兵衛さんと共に
タマの木の下に祀られている



不思議なことに神前より持ちかえったひしゃくは、いつの間にか底が抜けていた。女はこのしゃくが私と子どもを救ってくれたのだらうと、お宮参りの日に新しいひしゃくを神前にお供えした。このうわさが広まり、安産を願う人が底無しのひしゃくを奉納するようになった。いつしか底無しの財布も供えられるようになった。

大正時代には、お参りにきた人が、八幡様のお祭りの時に作った赤飯のむすびを干したものを貰って食べると尚安産に効くということで、与惣次村ではそういう人のために、祭りの頭家ではむすびが用意してあったということであった。

(与惣次)

源久さん

いつの頃のことか、中新田の帰命寺に源久さんという小僧がいた。たいへん子ども好きで、近所の子どもを集めてよく遊んだ。春になる帰命寺の垣根には八重樁が咲いたが、源久さんは庭掃除の時に落ちた樁を垣根の下に並べておいた。子どもたちは樁の花に薫を通して綺麗な提灯を作ったものであった。源久さんは子どもとよく遊んでくれるので人気があったが、ある年、夏風邪がもとで亡くなってしまった。亡くなる前に「俺は子どもが好きだから死んでからも子どもと遊びたい。子どもが私のところに遊びに来て危なくないようにお墓は丸くしてくれ」と言い残した。和尚は村人と相談して、子どもの大勢集まるトウロンバのお堂のそばに丸いお墓を建ててやった。

今ではおはつばたのおはつさんの碑と八兵衛さんの碑といっしょにまつられ、願い事によく効くとして八月十五日にお祭りされている。

(中新田)

萩の堂

織田信長が天下統一を目指していた戦乱の時代の事。遠州萩間の萩野大前の家には、古くから行基作と伝えられる観世音菩薩の像があり、代々厚く信仰されてきた。大前は、この戦乱の世の中に何とかこの像を後世に残す方法はないものかと考え、駿河の国

にやって来た。そして中根新田の芝切りといわれた金さん宅の屋敷内にお堂を建てさせてもらった。最初、お堂は「荻の堂」と呼ばれ西向きに建てられたが、その前を馬に乗って通る武士が度々落とされるのでお堂の向きを南向きに変えたということである。

それより百三十年くらいたった江戸時代の宝永七年（一七一〇）、板東秩父に真似て、駿河秩父の霊場となった。御詠歌に

初秋に風吹きすさぶ 荻の堂

宿かりの夜に夢ぞさめけり

とある。その後安政三年お堂の改築が行われ、盛大にご開帳がなされたということである。（中根新田）

延命地藏さん

赤良島のおばあさんたちに今でも熱心に信仰されている延命地藏さんは、どういふわけでここに祀られるようになったのか、はっきりしない。今は亡くなったが明治二十年生まれの人が十七才でお嫁に来た頃聞いたという話では、昔、静岡の古道具屋にあったものを一人の女が日本坂を越えてかついでこの地にやってきたという。石の上に金や色とりどりで彩色されていたあとが残る立派な地藏尊である。かついで来てこの地で亡くなった女のために後に青年が立てたという石碑を見ると、「翠顔妙？信女天保七？年三月二十三日」となっている。明治四十頃にこの地藏のお堂にすんで堂守をしていた女は近所の家で薬を貰ってはわらじを編んで細々生活をしていた。女が死んだとき、疫病が流行ったが、今まで以上にていねいに地藏さんを祀ったら疫病がおさまった。そんな事からかわからないが、この地藏は足の痛い人がお参りすると治ると言われている。今でもきれいに編まれたわらじが奉納されている。おなかに悪いできものができたのがお地藏さんのおかげで治ったとか、戦争中危ない命を助けられたとか、それぞれの理由で今でも厚く信仰されている。又、お堂にすんでいた人が後に成功をおさめた事からも霊験が信じられているようである。



祢宜島の延命地藏さん

地藏の横のお薬師さん（役行者）には、足の病気が治るようにとワラワラがあげられている。





水神さん

三右衛門新田



石田家で祀る白蛇さん

大住

大正十五年頃までは八月二十三日の縁日には、大井川町の宗高のちようちんやを呼んで、青年団が芝居の小屋掛けをし、かつらをかぶつての村芝居が行われた。村の人はこの日ムシロに座りお弁当を広げて楽しんだそうだ。

現在では毎月二十三日におばあさんたちがお念仏をしにお堂に集まる。

(称宜島)

水神さん

三右衛門新田の田んぼの中に、昭和三十年頃水神さんが祀られた。この辺りはそれ以前は、中新田淵とよばれる淵だった。淵には大蛇がいて、田んぼの土の上に人間がひざこぞでこすったような跡（大蛇が這った跡）が残っていて、村人は気味悪がっていた。淵の鴨を鉄砲で撃った者が亡くなったり、その辺りの土地を測量しようとしたところ、大蛇が出てとうせんぼをしたり、作業に当たった人が病気になったり亡くなったりした。小野田惣一郎さんの家で病人がでた時、祈禱師に占ってもらったところ、水神さんのたたりだということだった。そこで、小野田さんが淵のそばの田んぼの中に水神さんをお祀りすると病気は治った。土地改良されて淵はなくなったけれど、付近に住む人、付近に土地をもつ人によって毎年一回（三月二十四日）供養されている。

(三右衛門新田)

石田家の白蛇さん

大住の石田芳郎さんの玄関先に白蛇さんがおまつりされている。これは大正時代の終わり頃この家に祀られたものである。

芳郎さんが東京の親類宅に下宿していた時の事、その家でシンジンさんと呼んで祈禱をする席に同席した。ところが、どうしたことか祈禱師は祈禱を頼んだその家の者にではなく、同席した芳郎さんに激しく反応し、神懸かりした。そして、「我は淵に住む白蛇である。」と言い自分を祀って供養してほしい旨を伝えたそうである。急いで帰郷した芳郎さんは、家の者に話し「白蛇」を祀る事にしたそうである。

当時、芳郎さんの家は「一軒家の家」とか「淵端の家」と呼ばれ、村はずれの大きな淵の横にあった。村の人たちは、おそらく前の淵の主がそうしたかたちで供養を頼んだのだろうと話したそうである。芳郎さんのお宅の白蛇さんは、今はコンクリート造りであるがかつては木造の立派な造りだったそうである。三十年ほど前までは大きな淵では釣りをしたり、潜って遊んだりしたと言うが今は埋め立てられて田んぼになっている。

白蛇さんは申し事に効くとして村だけでなく焼津からもおまいりに来る程で、漁師は大漁祈願に魚の捧げ物をしたという。

(大住)

大覚さん

畑や田んぼのすみのぼたに、いろんな謂われのあるものが多かった。昭和二十五年以前まで大住にあったと言う「大覚さん」と呼ばれたぼたには、触ると祟る榎があって、その下に小さな自然石が置かれていたという。「大覚」さんは、歯が痛む時、豆を煎って「この豆が生えるまで歯が痛まないように」とお供えするとよくきくと言ってお参りしたそうである。昔はそのあたりの田を「大覚の田」と呼んだそうである。

(大住)

大住大井神社のおろちさん

大住の大井神社は旧大富村で一番古く、産土様が祀られている。祭神は、水の祖神（竜神）として崇められている。明治の始め頃、お宮の石垣積みに来た男が境内に入ろうとすると、松の枝から太いものが垂れ下がっていた。よく見ると、それは大きな蛇で、下の池の水を飲んでいるところだった。男はびっくりして道具を放り出して逃げ出したが、一週後ばかり床について死んでしまった。

成岡トモイチさん（明治二十五年頃の生まれ）は、若い頃、お祭りの幕を出そうとしてお宮さんの押入れを開けたら、押入れいっぱいくらいもある大蛇がいてびっくり

した事があったそうだ。成岡さんは恐ろしくて四十年位過ぎてようやくこれを人に話したと言う。この大蛇はここの主だろうと、拝殿の北にはこらを建て祀った。この「おろちさん」を祀ってからは、時々姿を見せた大蛇も現れなくなった。

(大住)

高林の大師

文化七年(一八一〇)、大島の高林の徳右衛門さんの母親が四国巡りをした時、府中の川越町の人と道連れになった。旅を無事続けることが出来たのも互いに励まし合ったからこそと、帰郷後はそれぞれ弘法大師の石像を刻むことを約束した。徳右衛門さんのお母さんは、新田街道の脇に建てたが、その後屋敷の入口に安置した。大師前という小字はこれからつけられた。「申し事に効く」というので藤守から飯淵方面の人まで参詣にきたそうである。

一方、府中の川越町の大師の方は、どういうわけからか寺の境内に埋まっていたのを、ある人の夢枕に立って掘り出され「夢見の大師様」として評判になった。この大師には西国巡りの同行者として「大島田中徳右衛門」と彫ってあったという。

(大島)

萩の森

文化十年(一八一三)、大島の斉藤信之助さんは西国巡礼の折に一人の行者と懇意になった。男はもとは武士であったが、若くして亡くなった主人の冥福を祈る旅をしているのだった。「命あるかぎり主人の冥福を祈るつもりであるが、もし私に万が一のことがあったら・・・と心配でならない。この薄幸な主人のために墓標の一つなりと残したい。なんとかお願いできないだろうか。」と言って戒名を書いた紙を託された。斉藤さんは屋敷のそばに自然石の墓標をたててやった。

文化十年癸酉 萩の森

篤実院殿頭義励忠居士

十月十日 行年三十才

というもので、後にこの墓標にちなんで小字萩の森の地名ができた。

(大島)

糸かけ観音さん

昔、平田染屋に奉公していた女中は、働き者で、気だてもよかったので主人はわが子の様にかわいがっていた。その女中が病気で亡くなった時、主人は観音様をまつり手厚く供養した。この観音様を拜むと願いがかなうという評判がたって、人々に信仰された。願いがかなうとお礼にきれいな糸を観音様にかけていたので糸かけ観音と呼ばれるようになった。今では石津の蔵珠院にまつられている。

(石津)

崇り と 信仰

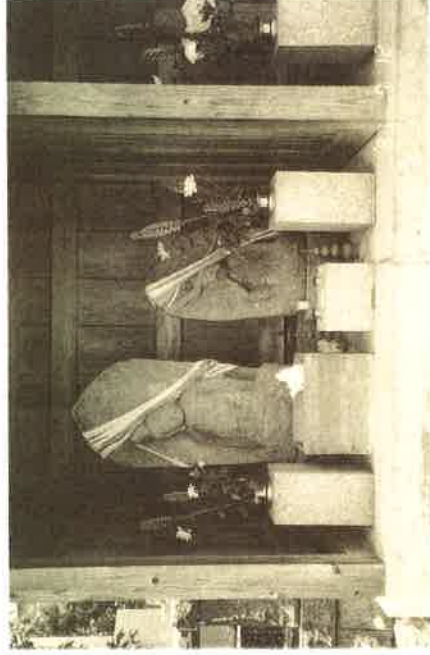
船幽霊

城之腰から焼津村などの海辺に伝わる話である。毎年七月十五・六日の夜更けに、場所は定まらないが海の方から人の悲しい泣き声が聞こえるという。ぼんやりとした沖合に、突然数千の白帆を挙げて往来する船が見えたりして、村人たちはこれを船幽霊と呼んでいる。海で死んだ亡者の執念が消えずに出るとされ、この日は漁夫は船を出すことを禁じられていた。

(焼津)

めやかし

焼津の入江明神より二百メートルくらい海辺よりに継子のもりと呼ぶ森があり、こ



糸かけ観音さんには、今でも赤い糸がかけられることがある

石津 蔵珠院

の森から夜更け二つの陰火が飛び出し、およそ四百メートルくらい先の城之腰村の田子橋付近を往来した。火は人の形に似ていて人々はこれを「めやかし」と呼んだ。毎年入江神社の祭りの時は、神輿もこの森を通る時は、音や声を出さないように気をつけたそうである。

(焼津)

八束穂 (笠森) 稻荷

天明四年(一七八四)京都の伏見稻荷から勧請してきた御分霊を中新田の新しい祠に移そうとしていた時のこと。神主を先頭に歩いて来ると、道の曲がり角でポーツと狐火が燃えた。勿論、狐の姿は見えないのだが、歩く道の先をポーツ、ポーツと照らすように燃えて、境内まで来ると消えた。「お稲荷さんをお祀りしようというのでお使いのお狐さんが狐火を焚いて案内してくださった。」と試してみな喜んだそうである。

この稲荷は正しくは八束穂^{ヤセ}稲荷と呼ぶが、昔から別名笠森稲荷とも呼び塵れ物を治してくださるとして村だけでなく遠くの人からも信仰されていた。

(中新田)

明王院の蛇

昔、明王院にたいへん良く働き、熱心に修行する小僧がいた。ある日、和尚が小僧を呼んだが返事がない。日頃の小僧らしくもない、おかしいことがあるものだとのぞいて見ると、机の上で居眠りをしていた。大声で叱っても気がつく様子もないので、ますます不信に思い小僧の顔のあたりをよく見ると、そこから赤い糸がずっと天井までのびている。見上げると、欄間に巻きついた大蛇の口とつながっていた。和尚は小僧の生き血を吸う大蛇を見て驚いたが「生物皆仏性あり。修羅の妄執を解脱し即刻退散せよ。」と経を唱えた。するとありがたき法力が通じたのか、もたげた鎌首もしいに垂れ退散した。その後、おんじょう淵に主といわれる大蛇がいるとか、川続きの

大口にも雨龍さまと呼ばれる大蛇がいるという話が聞かれるようになったが、どちらも仏性を得た明王院の大蛇が罪ほろぼしにこの地を守っているのではないかと噂された。

(小川)

天狗のおこした一本杉

江戸時代の終わり頃のこと、北海道原の庚申塚の横にあった大杉が暴風雨のため田んぼに倒れてしまった。村人たちが倒れた大杉をかたずけようと、ある者は枝をはらい、ある者は幹を切ったりし始めると、杉の木は地響きと共に元の通りに起きなおってしまった。皆「天狗さんの住んでる木を切ろうとしたので、天狗さんが怒って起こしたに違いない。」と言って、御神酒をあげて庚申様におわびをしたということである。

また、大正の終わりの頃、白髪の行者がやって来て、「この木には呪いがしてある」と言って、根元の方から二、三本の釘を出して見せたので皆びっくりしたそうである。切ろうとすると幹から血が出たなど不思議なはなしが伝えられている。

この大杉のぼたは街道沿いにあつてとても目立つ場所で、往来で疲れた人がよくいっぶくしたそうである。

(北海道原)

首塚稲荷

元龜元年（一五七〇）、武田信玄が花沢城を攻めた時、北海道原のあたりは戦に負けて逃げてきた者と追いかけてきた武田勢との戦いで多くの戦死者をだした。村人たちは討ち死にした兵の死体をいくつかの場所に集めて葬り、七つぼたとか七つ森とか呼んでいた。この墓地には度々妖怪が出て、通る人を脅かしたので、土地の人たちはこれを一つところに集めて社を建て首塚稲荷として祀った。七つぼたの一部は昭和三十年ころまで田んぼ中に耕されないで残っていたということであった。

(北海道原)

わが家の誇り

太田道灌の轡うまづな

文明五年（一四七三）太田道灌が「駿河の乱」平定のため本中根に陣をはった。その時戦勝を祈願して祀ったのが大井神社だと言われている。そして陣をはった河原を道灌河原といった。乱を鎮めた道灌が鎌倉に帰ったあと身内のひとりがこの地に残り、正月には道灌の残した馬の轡うまづなに御神酒を供えて祀ってきたそうである。この家は代々増田五郎兵衛を襲名してきた。

神社から屋敷まで水害を防ぐ土手を作ったが、掘ったところを五郎兵衛淵といった。慶長九年（一六〇四）の洪水では大井神社の御神鏡が五郎兵衛淵に沈んだので氏子が探したが発見されなかった。氏子の人たちは昔からこの事を語り伝え、川上では不浄のものを洗わないようにと言い伝えてきたという事であった。

（本中根）

鳴釜煎なりかま

承久年間（一二一九～一二二一）の頃のこと。大住の百姓が地中から石櫃に入った鑄物の釜を掘り出した。釜の内側に一の寺があったことから「内一文字の釜」と言っ
て大切にしていたが、この事が京の都まで評判となり、將軍東山義政公のお目に止まるまでとなった。その時、この釜は鑄物師として名の知れた「貞呂」という人の作だとわかり「内一文字貞呂の作」というようになった。

その後、寛文年間（一六六一～一六七二）頃、この釜につて不思議な事が言われるようになった。この釜に水を入れて火にかけると、蓋が右や左に動いて音が鳴りだすが、火から下ろして蓋を取ろうとすると、どんなにひっぱってもけっして取れない。その上、釜を振っても水の音さえしないというのである。釜を再び火にかけると蓋は

造作もなく取れるということで見せ物として方々を廻ったそうである。この蓋のなる音で天気の良い悪しがわかったといわれている。

(大島)

枝咲茶釜

中新田の塚本氏の一族に伝わる茶釜に「枝咲茶釜」という釜があった。塚本重右衛門さんは本家からこの茶釜を渡された。重右兵衛門さんから分家の仁左衛門に、仁左衛門さんから分家の覚兵衛、覚兵衛さんから分家の伊之右衛門さんへと次々渡されると、それぞれの家はそれからそれへと栄えていった。その様子は枝を出しては栄えていくというので、この釜のことを「枝咲茶釜」と呼んだそうである。もしもこの茶釜をひとりじめにして、譲らないと、その家には不幸をもたらすともいわれていたそうである。

(中根新田)

かくれざつと

むかしからかくれざつとが米をつく音を聞くと、一代の内に身上がよくなるといわれてきた。大富に住んでいた次右衛門さんという人の妻は一週間続けて、毎晩ポコンポコンと踏み臼の音を聞いた。言い伝えどおり、だんだんと家が栄えていったそうである。

(大富)

みだらけさんの由来

和田(一色)の良知氏はみだらけと呼ばれた。徳川家康が鷹狩りのためにこの地にきた時、良知氏の先祖の惣右衛門を召して狩場について説明せよと命じられた。惣右衛門はみやげにと思い、どじょうをとって藁筒に入れて献上しようとしたところ、どじょうは藁筒から漏れて一匹もいなかった。家康公は惣右衛門のかざらない人柄を大

いに笑って、金をみやげとして包まず手渡した。惣右衛門さんはそのままふとこころに入れて帰って来たが、川を渡るときにころんでその金も無くしてしまった。このように一風変わって徳実無欲な人なので、家康公はミタラケ、ミタラケと言って召されたということである。

(和田)

人

小川のげんぞうさん

明治時代の終わり頃、小川の与惣次寄りの小さな川のほとりに「げんぞう」という変わり者の男が住んでいた。げんぞうは、その頃でもちよんまげを結っていた。げんぞうはお正月がくるので餅をつこうと思った。臼と杵を用意して、もちごめを蒸して、「さあ、うまい餅をたんとつくぞ」とはりきって始めた。最初のこづきはよかったけれど、ぺったん、ぺったんついて、さあ困った。げんぞうは独り暮らしだから手返しをする者がいない。「やれ、つきにくい餅だなあ」そう言いながら尚もつき続けた。餅が杵にくっついてはなれない。「よいしょっ」下ろした杵を思いっきり振り上げたひょうしに餅はすっ飛んでいって裏の木戸にべったりとくっついた。げんぞうは、それでも「はて、おかしいことがあるもんだ」と首をかしげていたそうだ。

村に葬式があった時、近所の衆が集まって揃ってお悔みに行く事になった。みんな集まったけど、げんぞうがちっともやってこない。「おおい、げんぞうさん早くしておくれ」様子を見に行ってみると、げんぞうが袴の片方に両足を突っ込んで歩けないでよろよろしていた。そして、顔を出した近所の衆に「なんと昔の衆は馬鹿なことをしたもんだ」と言いながらなおもぐずぐずしていたそうだ。げんぞうは、一本ずつ足を入れる事を知らなかったので、昔の人が必要のないむだな布を袴に付けたと思った

のである。そんなことからこの辺りでは仕度が遅い事を「げんぞうさんの仕度」とか「げんぞうさんの袴」と言ったそうだ。

げんぞうの家の横を流れていた巾二メートル位の川は通称「げんぞう川」と呼ばれた。

(小川)

釈迦堂の弥吉

洞福寺の西へ二百メートル行った所に、昔釈迦堂が建てられていた。そこに弥吉という六部が住み着いた。弥吉は毎日、近くの村々を托鉢して歩いたが、随分と質素な生活をして余財を蓄え、ここに西国三十三番の観音像を刻んだ。また村内の土橋を三ヶ所ほど石橋に架け代えたりしたので村の人々に大変信頼されていた。弥吉はその後、十五年間全国を行脚し釈迦堂に戻ると、西国八十八ヶ所の霊場の内、二十二ヶ所を選び二十一体の弘法大師の石像を刻ませた。

この石像も観音像も今は洞福寺に祀られている。

(大島)

動物

報恩の猫

中根の徳太郎さんが金物の商いで遠州白羽に行った時、可愛い三毛猫の子どもを貰ってきた。子どものない徳太郎さん夫婦はこの猫をわが子のように可愛がって十何年も飼っていた。ある時、徳太郎さんのおかみさんが病にかかってどうしても熱が下がらなかった。医者は「二十日熱だから長くかかる」といった。そばにいる猫を見な



猫の報恩に祀られたポタ

中根



報恩の猫の像

がら、おかみさんは床の中で「やれやれ困ったのう。この熱には水鳥が効くと聞いたが、ミケやお前は鼠をとるのは上手だが水鳥じゃあな。」とつぶやいた。次の日の朝の事、おかみさんが熱でうとうとしていると手を誰かが撫でていた。眼を覚まして見るとミケが盛んに手を触っていたのだった。見ると枕もとには水鳥が置いてあった。おかみさんはびっくりして「ミケよおまえかい。ありがとうよ。」というミケはおじぎをするようにうなずいた。水鳥のおかげでおかみさんの熱はたちまちひけたそうである。ミケが大正十四年（一九二五）に死ぬと間もなく、左衛門島にちいさなコンクリート造りの左まねきの猫をたてた。今でも徳太郎さんの家の前の道路脇のボタに猫の像はひっそりとたっている。

（中根）

新也さんの猫

中根の新也さんは小さい時にかかった痲瘡がもとで失明してしまったが、たいへんいい人だった。三味線が得意でよく炉端でつまびいたそうである。新也さんはたいへん猫好きで若い頃から三毛猫をかっていた。ところがお嫁にきたことさんはどうしても猫が好きになれなくて、三毛もことさんがいる時は遠慮してか新也さんのところにも近づかなかった。その代わりことさんの留守には必ず新也さんの膝に乗っていた。そんな猫の気遣いを知っていた新也さんは、ある日好きな三味線をひきながらこんな歌を歌った。

わたしや中根の新也さんの猫だ

ことさん来ないとに（ことさんが来ないうちにの意）せつせと踊れ

ブンキチャンキ　ブンキチャンキ

すると猫は火掻き棒をかついで歌にあわせて踊り、調子に合わせて茶釜の縁を叩いたりした。踊る新也さんの猫は評判になって昭和三十年ころまでこの歌はお囃子共の人々に記憶されていたという。

（中根）

洗濯狐

私川橋のほとりにすむ女狐と向河原にすむ女狐が化け比べをすることになった。ちょうど袖ヶ浦で領主の浜遊びが催されることになっていたのも、その折り、殿の御目にとまった方が勝ちということになった。当日は我こそは一番と磨きに磨きをかけて村娘たちが殿のもてなしに大勢集まった。その中に群を抜いて美しい娘が二人いた。腕をかぎりに化けた二匹の狐であった。二人の娘のあでやかさは他の娘たちの及ぶところではなく、今年が一番はこの二人のうちのどちらかであろうということになった。しかし二人はいずれとも甲乙つけがたく今年も異例のこととして、二人とも殿の御前に召しだされることとなった。身じまいを整え御座近くに進もうとした時、家老が一方の娘に向かって「かかるむさくるしき身装にて御目通りなど不届き千万」と持って来た扇で押しやったので、その時勝負は決まった。実は、この私川橋の狐は昨夜、魚捕りに出かけたまま化けたので着物の裾のあたりが汚れていることに気がつかないでいたのであった。

この失敗のあとからは、私川橋の狐はとてもきれい好きになって、ひまさえあればからだを洗うようになって、川でぼちゃぼちゃ洗濯する姿を道行く人々がよく見かけたということである。

(小川)



小川の川

化け比婆で負けた狐は、その後この川で洗濯をするようになったといわれている。